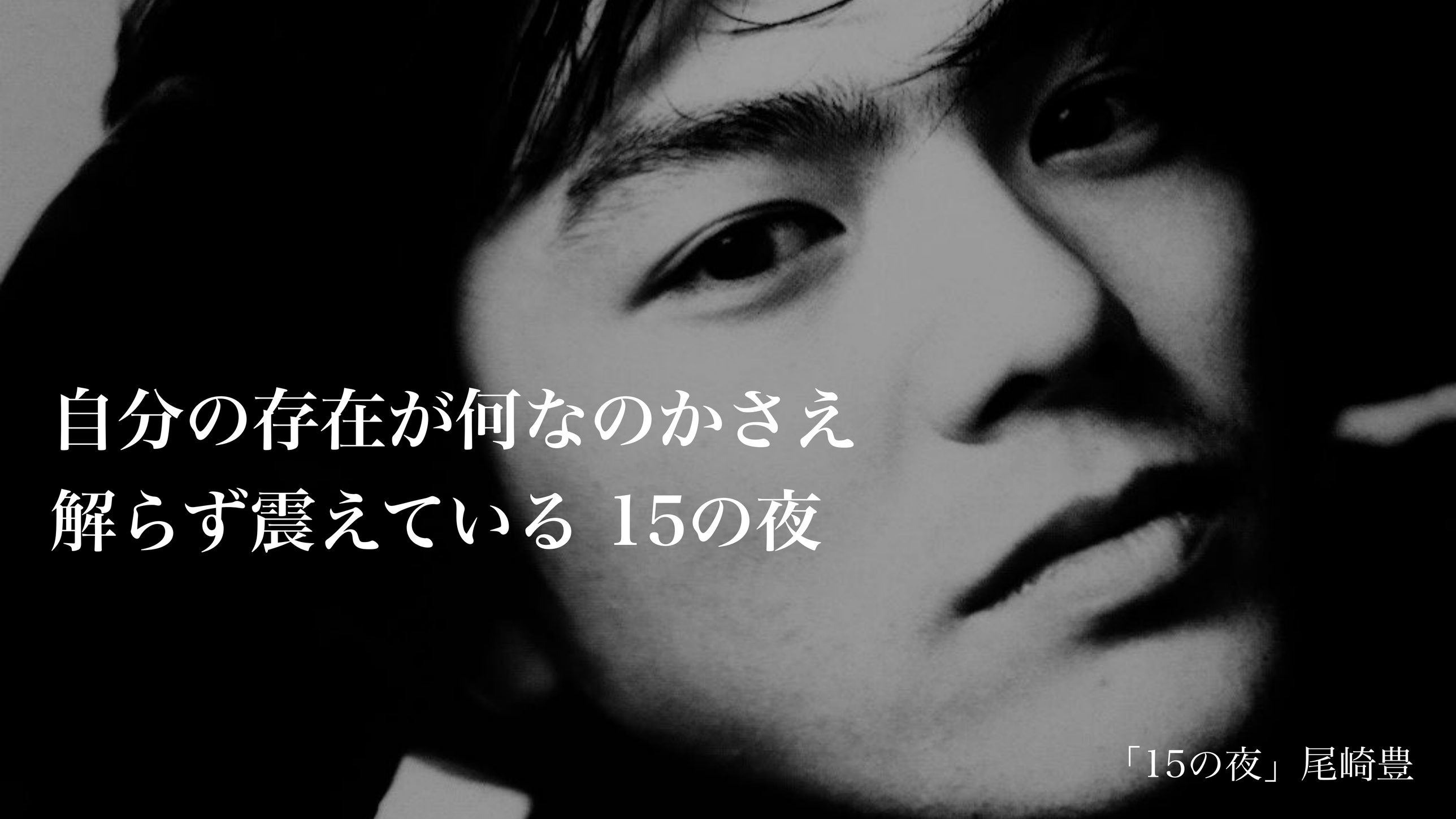
認識論 ～西洋思想史とカント～

法学部法律学科三年 小野竜大


自分の存在が何なのかさえ
解らず震えている 15の夜
「15の夜」尾崎豊

鳥たちが見る色あざやかな世界　　-日経サイエンス　2006年10月号（http://www.nikkei-science.com/page/magazine/0610/bird.html）

実際のところ、私の存在とは？

実際のところ、世界の本当の姿とは？

「私は諸君に哲学を教えるのではない、
哲学することを教えるのだ」

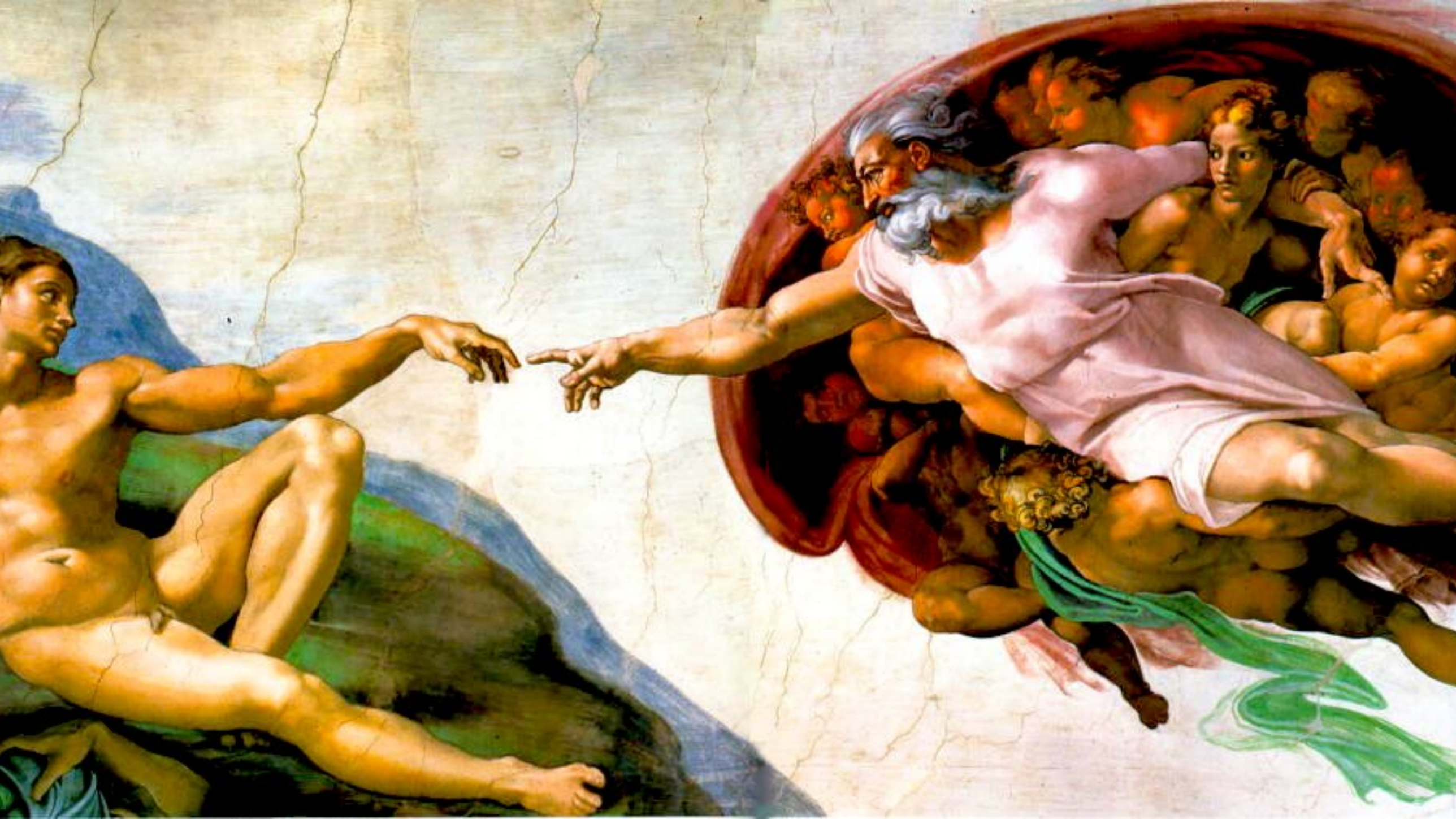
イマヌエル・カント （1724~1804）

哲学史

哲学史とは、「知のアーカイブ」である

- 先人の思考過程をみることで、自分を相対化でき、また既に誰かが犯した同じ過ちを繰り返さずに済む。
- 自然権のような、今日では日常の思考フレームとなった考え方の源泉に触れることで、表面的だった理解を深めることができる。
- 「日常の思考フレーム」の基盤が薄弱だったことがわかるかもしれない

「哲学マップ」貫成人 /ちくま新書（2004年）



古代哲学

哲学の産声

時代背景等

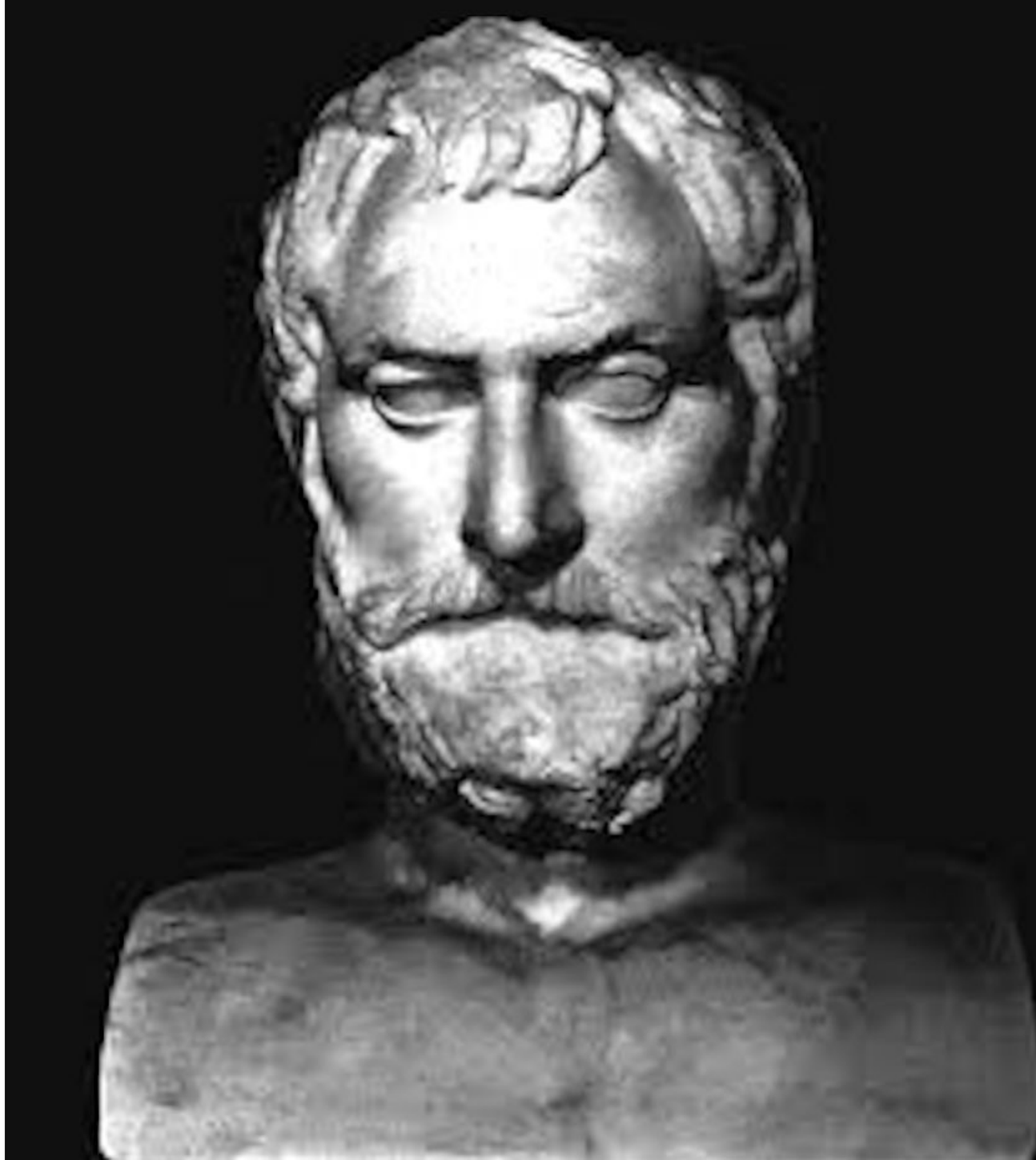
- 地中海世界は重要な交通拠点
- 一方で、土地は穀物生産に適さず、植民市政策が重要に
- オリエント世界との交易が活発化
- 奴隷が増加し、貴族政ポリスが形成された
- 法律、政治体制、芸術などの文化が生み出され、後世西洋文明の規範に

タレス（前625頃～前547頃）

- **個々の事象にとらわれない「全体思考」を初めて行ったとされる**

- **「万物は水である」**
  →水が気体・液体・個体に変化することから

⇒以後、万物の素「アルケー」を探ることがギリシア哲学の中心に



プラトン（前427～前347）

- **師ソクラテスの遺志を継ぎ、「イデア論」を唱えた。**

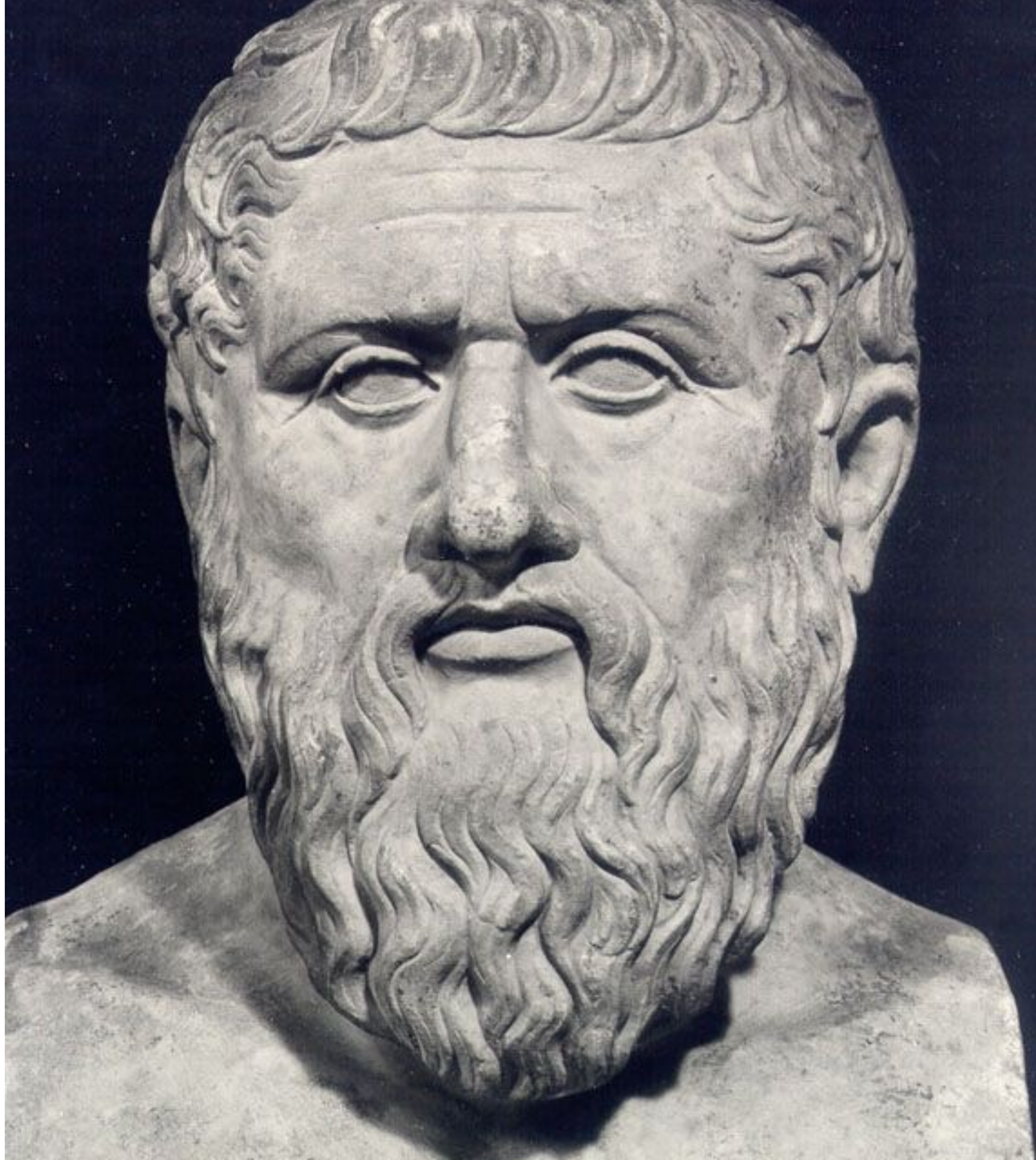
プラトン主義

永遠だが単純な**イデア界**

⇕ 二項対立

生成消滅だが複雑な**現実世界**

⇒現代に至るまで暗黙の前提に

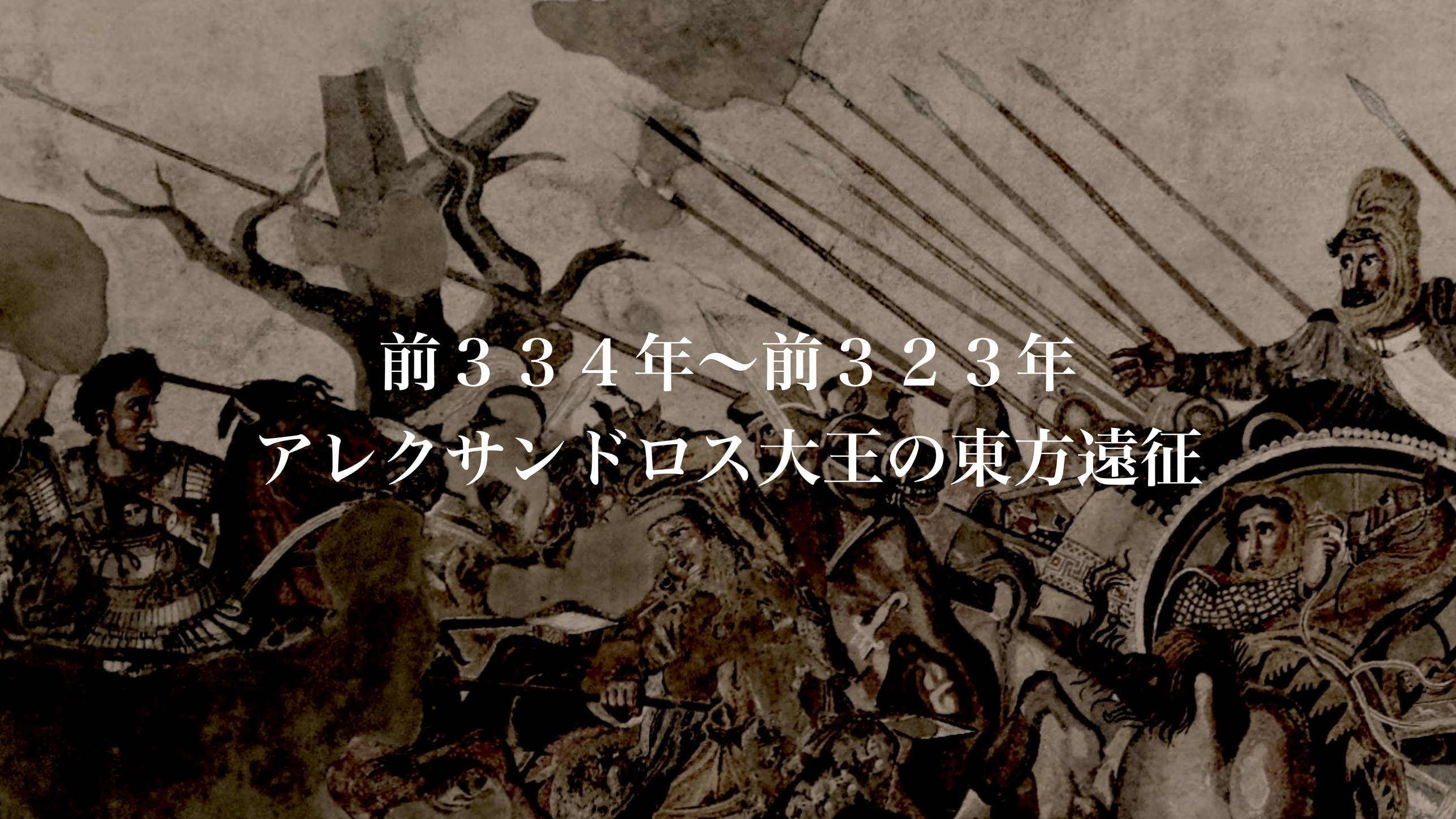


アリストテレス（前384～前322）

- **プラトンに師事するが、イデア論を修正。**
  ex)本当に「馬のイデア」があるのならば、
  生まれて初めて馬を見てすぐに「馬だ」と
  理解出来るはずだ

- **非現実的なイデアより、現実世界を重視した。**
  →真理を現実世界でも捉えられるとした

- **現実世界を観察、記録し、性質や特徴を整理することで、知識を首尾一貫して体系化させていくという、科学の基礎を築いた。**



前３３４年～前３２３年
アレクサンドロス大王の東方遠征

S K Y T H E N
G E T E N
ILLYRER
Donau
THRAKIEN
MAKEDONIEN
EPIRUS
HELLAS
Epidamnos
Pella
334
Odessos
Byzantion
Herakleia
Ilion
Granikos
MYSIEN
Chaironeia
Athen
Sardes
LYDIEN
Ephesos
Sparta
Milet
KARIEN
Halikarnassos
LYKIEN
KRETA
Olbia
Tanais
BOSPORANISCHES REICH
Chersonesos
Pantikapaion
Schwarzes Meer
Sinope
Phasis
KOLCHIS
Kaukasus
SARMATEN
PAPHLAGONIEN
BITHYNIEN
PONTOS
Trapezunt
Gordion
Ancyra
Comana
333
PHRYGIEN
KAPPADOKIEN
KILIKIEN
PAMPHYLIEN
Side
Kilikische Pforte
Tarsos
Issos
333
A.
ARMENIEN
Amida
Edessa
Nisibis
331
Gaugamela
Arbela
Nikephorion
ZYPERN
Mittelmeer
Kyrene
KYRENAIKA
SYRIEN
Byblos
Sidon
Tyros
Palmyra
Damaskus
331
332
Gaza
Jerusalem
Paraetonion
A.
332
Ammon-Orakel
331
Memphis
ÄGYPTEN
Nil
Theben
Syene
Petra
NABATÄER
Rotes Meer
A R A B I E N
MESOPOTAMIEN
Tigris
Euphrat
Opis
Babylon
BABYLONIEN
Susa
324
A. in Susiana
SUSIANA
330
324
Persepolis
Pasargadai
PERSIS
Persischer Golf
Zagros
MEDIEN
Ekbatana
330
Aspardana
Elburs
Rhaga
Kaspische Pforte
Kavir-Wüste
HYRKANIEN
Zadracarta
Hekatompylos
PARTHIEN
Kaspisches Meer
CHORESMIER
Aralsee
MASSAGETEN
Jaxartes
SAKEN
Ferghana
A. Eschate
329
Marakanda
Nautaca
SOGDIEN
Oxos
328
A. am Oxos
Drapsaca
Baktra
BAKTRIEN
MARGIANA
A. in Margiana
Susia
ARIA
A. in Aria
330
Prophtasia
DRANGIANE
Lut-Wüste
A. am Kaukasos
Kabul
Hindukusch
GANDHARA
Arigaeum
327
Taxila
Khaiber-Pass
Bukephala
Nikaia
326
A. am Hyphasis
Reich des POROS
Hydaspes
Hyphasis
A.
329
ARACHOSIEN
A. in Arachosien
Bolan-Pass
Mulla-Pass
326
Multan
A. am Indus
Indus
326
INDIEN
Pattala
Rhambacia
325
Zug des Krateros
KARMANIEN
A. in Karmanien
324
325
Pura
Harmosia
GEDROSIEN
325
Fahrt des Nearchos
Indischer Ozean
Pamir
Tienschan
Taklamakan
Jarkand
Himalaja
RS
dt

中世哲学

神学と哲学の融合

時代背景等

- 前31年、プトレマイオス朝エジプト滅亡→ヘレニズム時代の終焉
- それから200年、「ローマの平和（Pax Romana）」と呼ばれる繁栄
- 初期ローマ帝国は多神教信仰であり、皇帝も神の一人とされていた
- 一神教のキリスト教は異端であり、ネロ帝（64年）・ディオクレティアヌス帝（303年）による大迫害を受ける
- 五賢帝時代→軍人皇帝時代と内乱が続き、コンスタンティヌス帝はついにキリスト教を公認（ミラノ勅令・313年）し、テオドシウス帝は国教とした（392年）

アウグスティヌス（354~430）

- マニ教より回心したのち、若き日を「肉欲に支配され荒れ狂い、まったくその欲望のままになっていた」と回想（『告白』）

- 強大な力を持つローマ帝国に対するべく、教会の権威を確立させた

①誤った認識を「誤り」と言えるためには尺度が必要であり、その尺度は永遠の存在でなければならない（イデア論的発想）
②永遠の真理を、人間が作り出せるはずがない
③よって、神は存在する

⇒普遍論争へ
⇒教会の権威の隆盛

トマス・アクィナス（1225～1274）

- エルサレム奪還のため組織された十字軍により、イスラム諸国で研究され続けていたギリシア哲学（アリストテレス哲学）が逆輸入された

- アリストテレス的思考法により、普遍論争を調停し、神学とギリシア哲学の融合を図った

- アリストテレス哲学を、理性の及ぶ範囲内においては最高の学問とし、一方ですべての根本である「神」の存在は信仰でしか理解できないとした

⇒教会の権威は最高潮に

『教皇は太陽、皇帝は月』

1618年～1648年
三十年戦争

近世哲学

「神」から「人間」中心へ

時代背景等

- 大航海時代→商業革命→資本主義経済の発達
- 主権国家体制（絶対王政）の形成
- ルネサンスを経て、宗教改革が勃発
- 科学革命が起こる（天動説の否定、万有引力の発見）
- 近代的合理主義が確立され、自然科学が発達

ルネ・デカルト（1596～1650）

- 神学校で学び、自身も三十年戦争に従軍
- 「**方法的懐疑**」を考案

疑いの余地のあるものは確実とは言えず、
疑う余地の一切ないものは確実と言える。
よって、疑いうる一切を疑ってみる必要がある

→最後に残るのは、「疑っている私」のみ

「我思う故に我あり」

問いの方向が世界から自己へと転換

ルネ・デカルト（1596～1650）

懐疑前：世界の中に存在する私
懐疑後：私に認識されることによって世界は存在

→根拠として「神の誠実」を導入

神の存在照明
①非存在は存在に比べ不完全である
②神は完全である
③よって神は存在する

・心身二元論（物心二元論とも）を提唱

→精神と肉体はそれぞれ独立しており、
さらに神を加えた三要素で世界は構成

⇒主体と客体の分離「デカルト主義」

ライプニッツ（1646～1716）

- 世界は非物質であるモナドから成り立つと主張
- モナドは完全なる姿を目指す傾向があり、究極的には神の姿を目指すとした→「**予定調和説**」

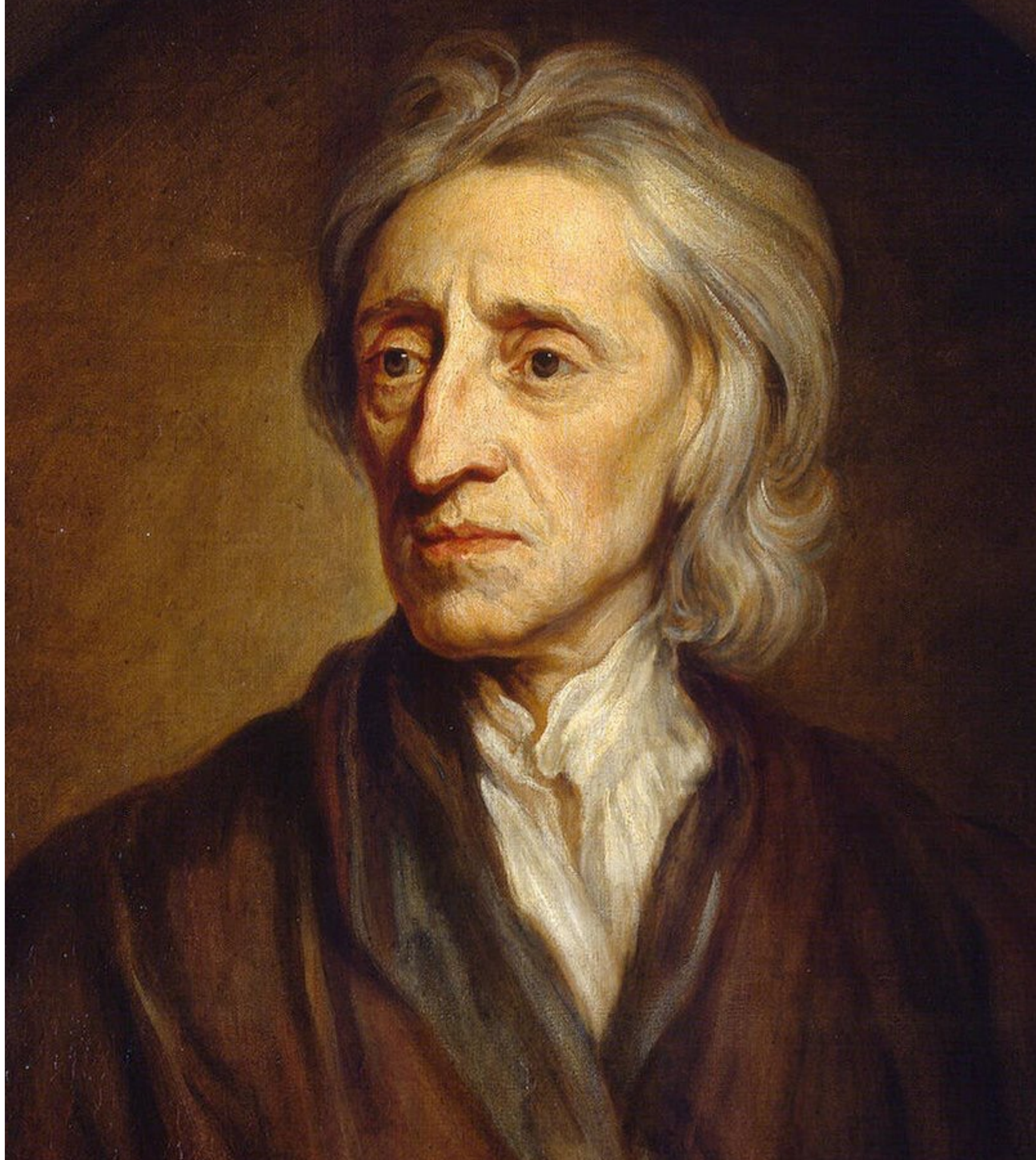
予定調和説に立つと、世界は初めからうまく行くように神が設計したとも言える

世間の「悪」は世界のアクセントのようなものであり、放っておけば勝手に調和する
その克服のために人間に自由意志がある

ジョン・ロック（1632～1704）

- 社会契約説を提唱
- 各個人が生まれながらに自由権・自然法をもつとした→名誉革命（1688年）など
- 封建制を否定→各人が平等である必要性

「生得観念」を否定
→人は「白紙状態」で生まれ、さまざまな知識は知覚や伝聞などの経験によって形作られるとした



ヒューム（1711～1776）

- 自我や因果性の存在を否定
- 人間の知識は「印象」と「観念」から成るとした

→雨が降っているから濡れるのではなく
「雨が降っている」ことと「濡れている」ことを
繰り返し経験することで因果関係のように錯覚

合理論と経験論

人間の「知性」に関する対立

合理論

ホッブズ・パスカル・スピノザ・ライプニッツ

宇宙全体や神など、
論証不可能なことまで主張

独断論

「知性」を過大評価

経験論

ロック・バークリ・ヒューム

実体や客体を否定するどころか、
自然科学までもを否定

懐疑論

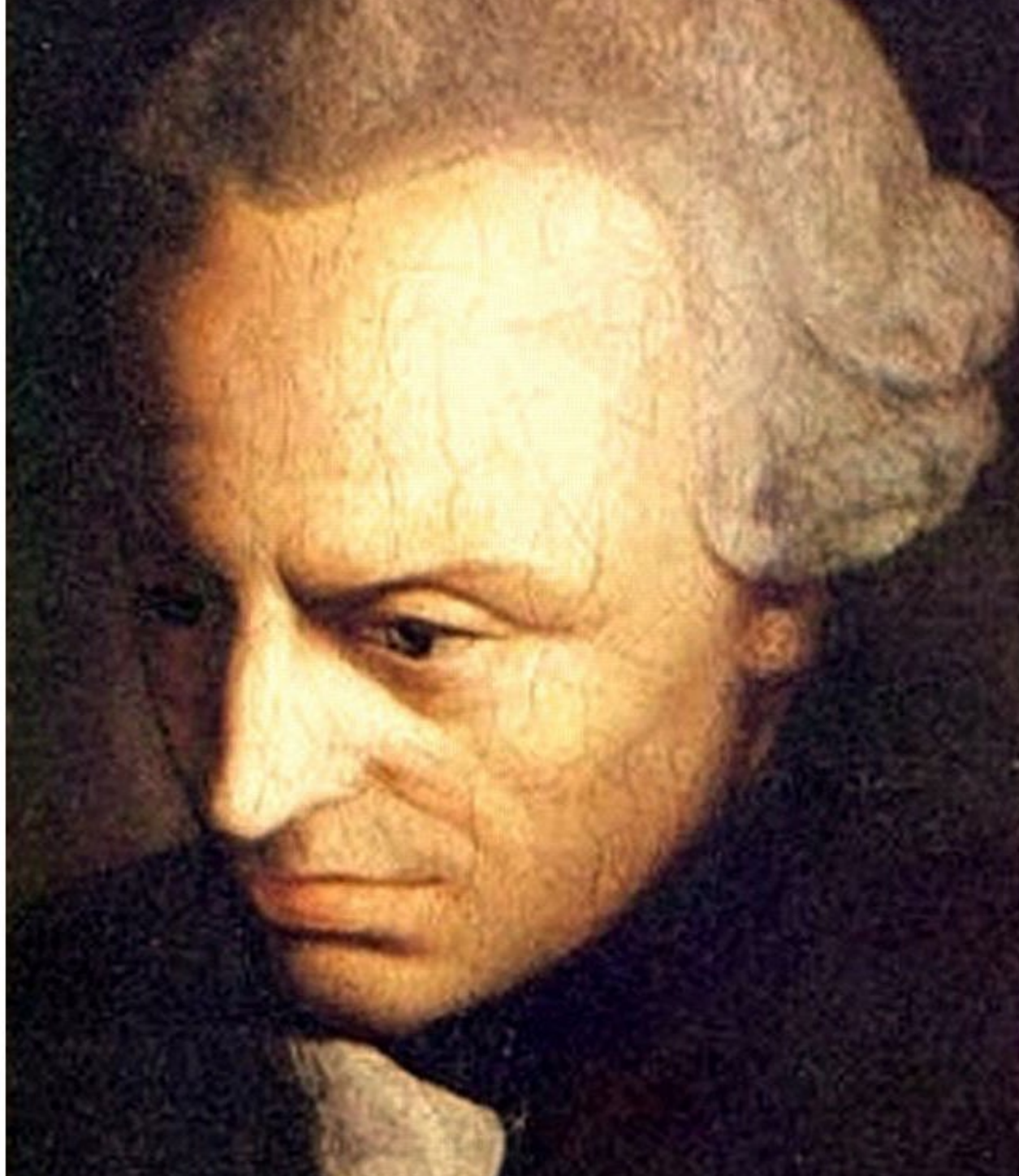
「知性」を過小評価

カント（1724～1804）

・合理論（独我論）と経験論（懐疑論）とを調停

独我論に対して
形而上学について思考するのは人間の習性（不可避の病）であるが、有意味な答えを出すのは不可能

懐疑論に対して
個々の感覚的所与を知性が統合することにより経験が成立する→経験は知性なくして成立しえない



カント（1724～1804）

従来の思考様式
正しい認識＝事物の姿を、主観を交えず、ありのままに受け取ること

⇧ 批判

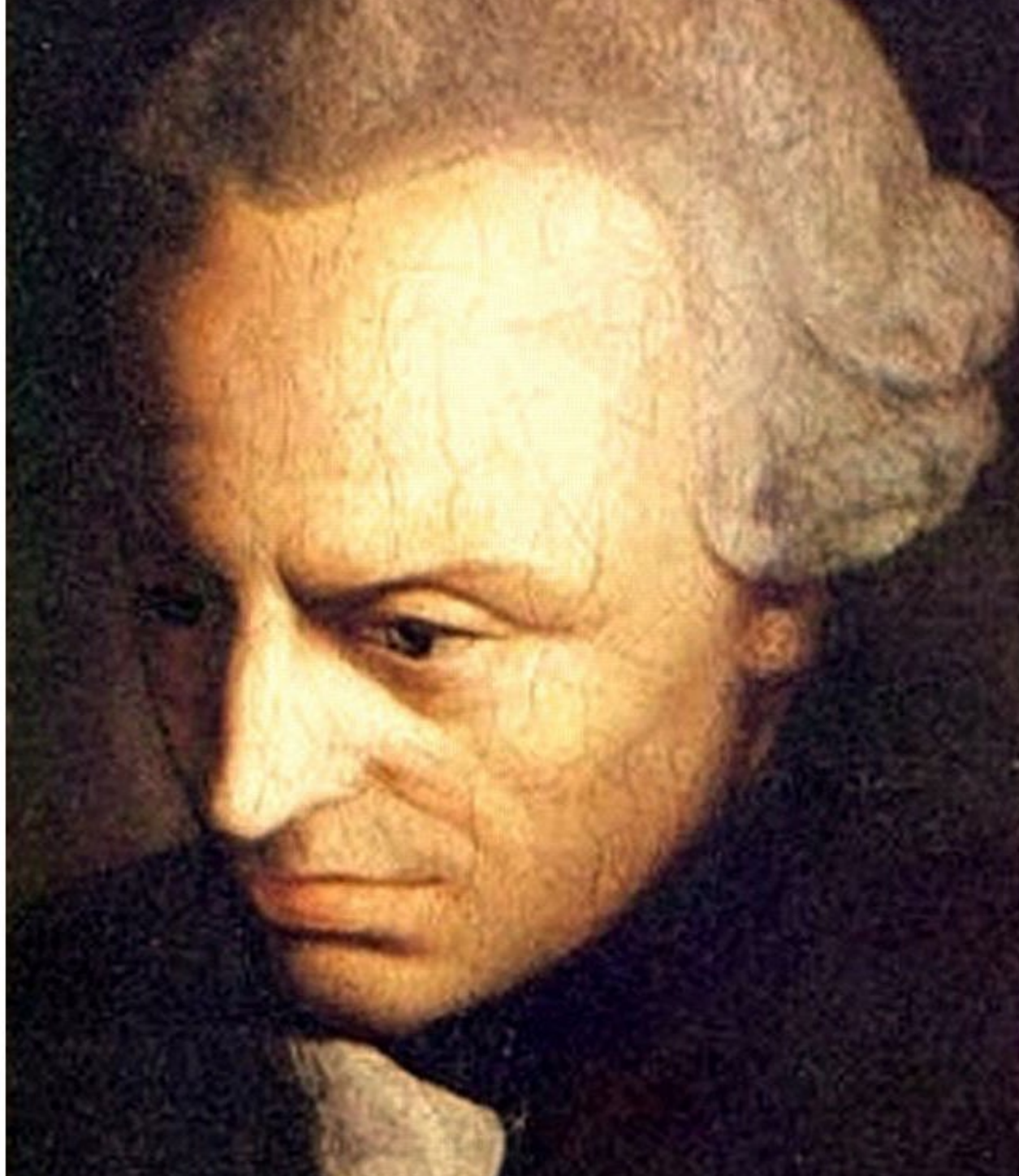
それ自体、主観的認識であって客観性を持たない

⇩ コペルニクス的転回

「認識が対象に従うのではなく、対象が認識に従う」

「認識は主観的な条件のもとで成立する」

世界は主観による構成物だと捉えることで、
はじめて客観的認識が可能となる



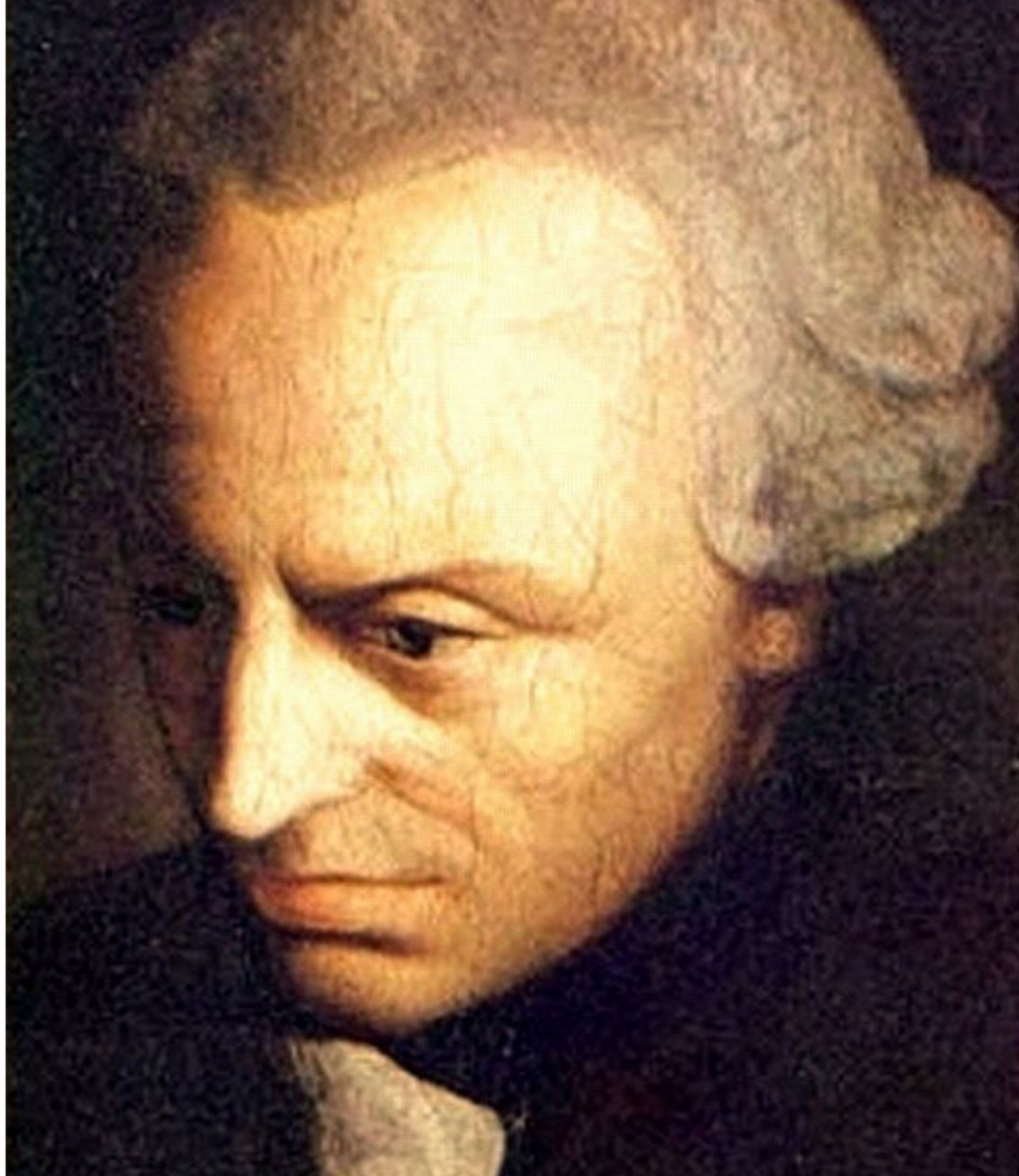
カント（1724～1804）

・認識は、感性（受動）と悟性（能動）のふたつのはたらきが統合することによって成立するとした

感性…時間や空間を通じて受け取る
→時空はそのものとして存在するのではなく、「我々の認識を可能にする条件」として存在

悟性…経験の形式〈カテゴリー〉を投げ入れる
→「因果性」や「単一性」などの条件を、我々が世界に付与することにより認識が可能に

時空や因果関係は、世界の成立に関わるのではなく人間認識の成立にかかわっている



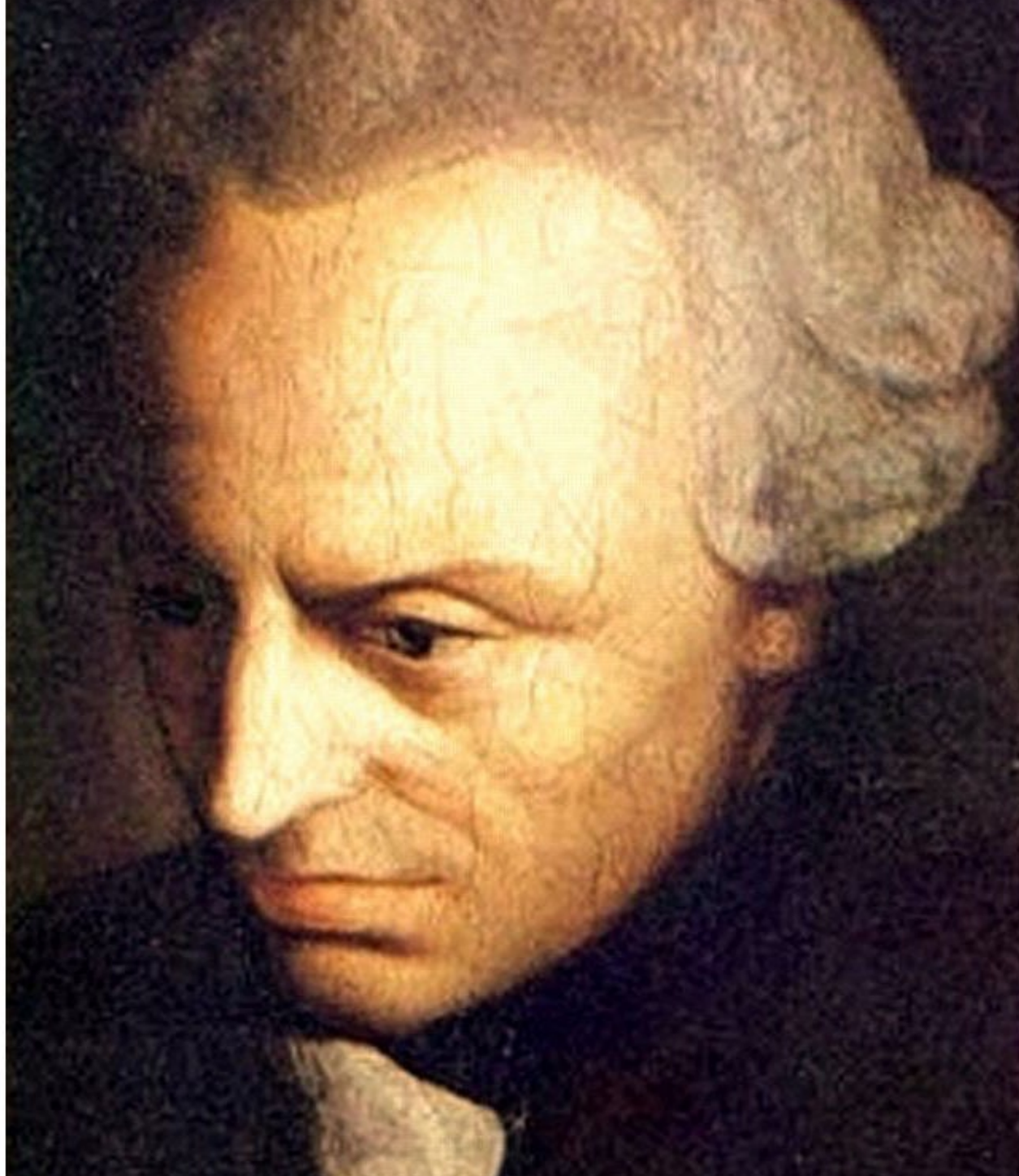
カント（1724～1804）

・「経験の地表」を確定させた

伝統的形而上学
→神が真理を保証し、人間は知性によってこの体系に参入

コペルニクス的転回以降
→世界は人間の認識によって成立し、その経験の中でこそ真理に近づける。

・「現象」と「物自体」の峻別
形而上学（物自体を認識しようとすること）は「不可避の病」だが、人間認識の限界を超えている



近代哲学

「反哲学」の時代へ

時代背景等

- 産業革命が起こる
- アメリカ合衆国の独立（1783年）、フランス革命（1789年）
- 自由主義とナショナリズムが目覚める
- 市民階級が形成される
- 工業化・都市化により田園や異国、過去を追想するロマン主義が生まれる

フォイエルバッハ（1804～1872）

・神学と哲学とを分離させ、哲学的思索の中心に人間を据えた

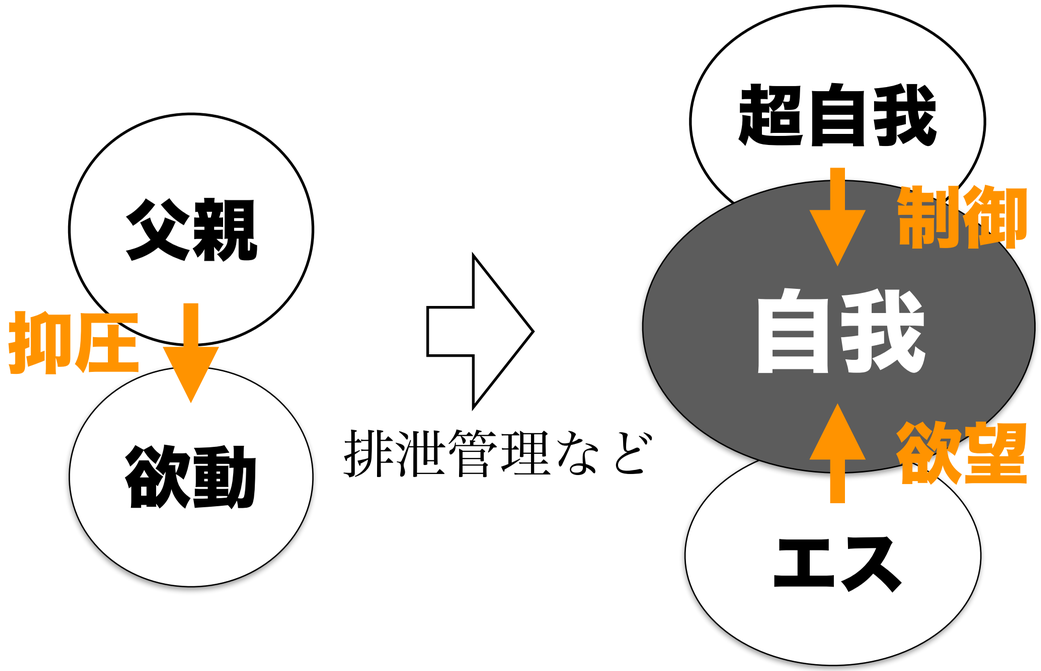
知性や愛を望むあまり、人間は神を発明し、救いを求めるように

⇩

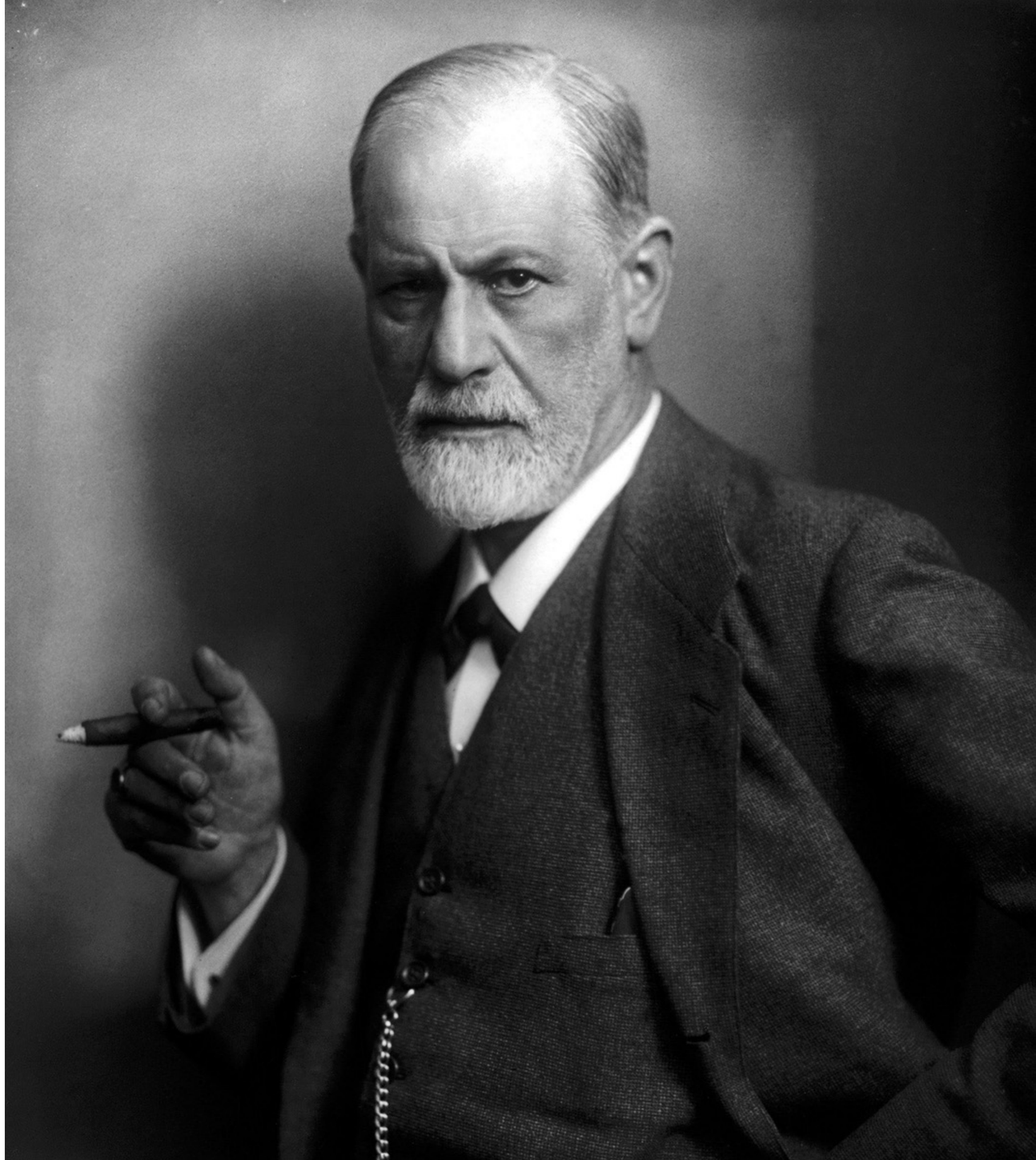
自ら創り出した神に行動や価値判断を支配されるように（＝自己疎外）

フロイト（1856～1939）

・自我の透明性を否定



自我は決してあらかじめ存在するのではなく、
欲動や社会規範の中から生まれる



ニーチェ（1844～1900）

・ギリシア以降の哲学を否定

ニヒリズム

↓

すべての価値は妬み〈ルサンチマン〉によって生じる＝「神は死んだ」

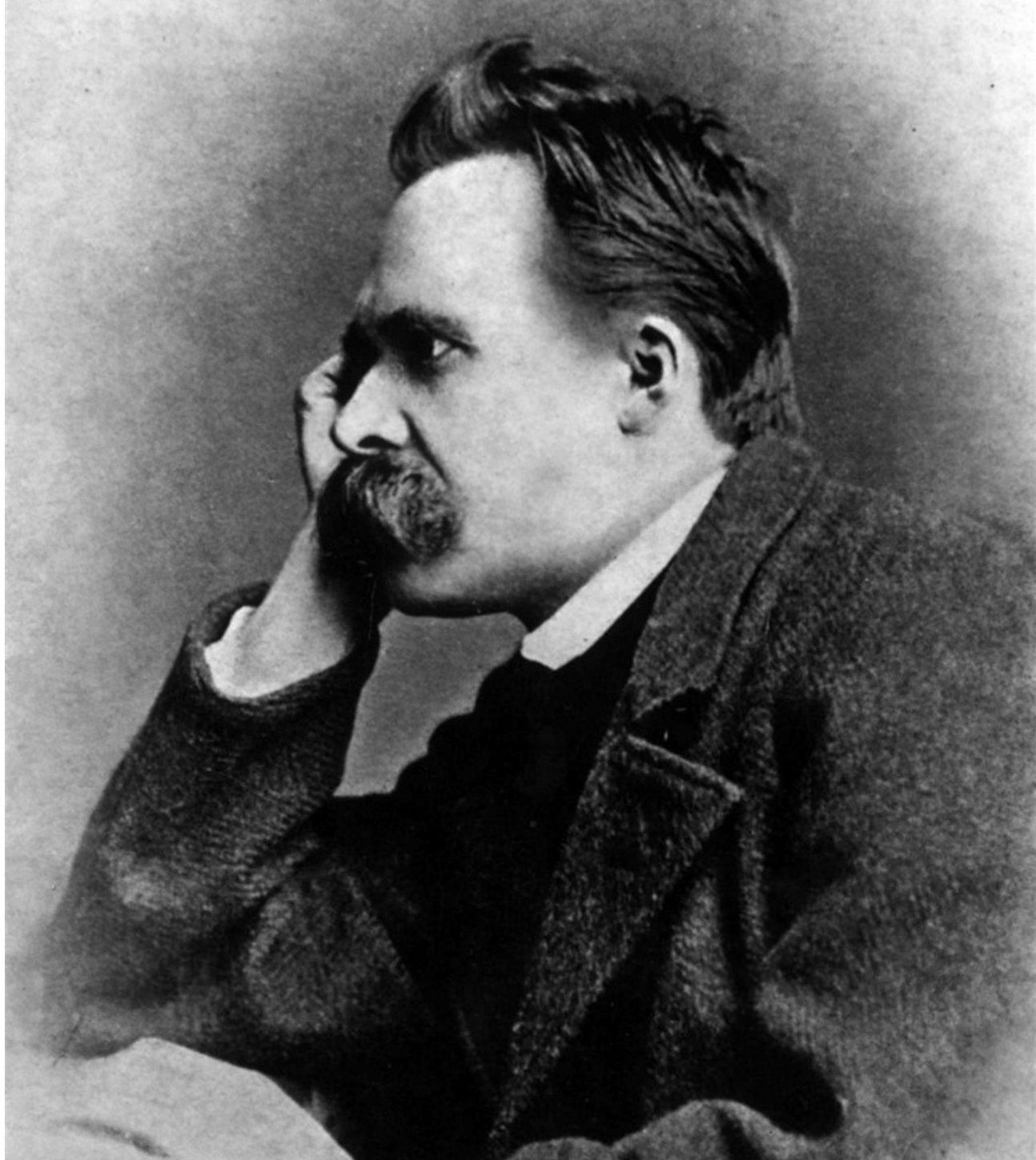
永遠回帰

↓

価値がなくなれば、変化もなくなる

力への意志

それを乗り越え（超人）、終点を定めない成長を目指す



哲学的問いの変遷

＝問いの方向性の変遷

①「～とはなにか」

↓　プラトン

②「私とは誰か、それを知りうるのか」

↓　デカルト

③「なぜそれを思うのか、
問いに意味がなかったときいかに生きるべきか」

ニーチェ

現代哲学

より広く、より深く

時代背景等

- 不完全性定理や相対性理論によって、自然科学の根底がゆらぎはじめる
- 二度の世界大戦
- 戦争の反省から、権力や社会構造への批判が生まれる
- ベトナム戦争を機に、世界中でヒッピーや学生運動の隆盛
- 実用性の低さから、哲学への批判が高まる
- より具体的な実践哲学へ

実存主義

- **サルトル**（1905～1980）

  人間は、生まれる前から本質や目的が定まっているわけではない→実存は本質に先立つ

  また、人間は生まれながらにして自由であるが、なんら指針のない状態ではかえって苦痛である→人間は自由の刑に処せられている

- **メルロ＝ポンティ**（1908～1961）

  「私」とは「身体」である→身体的実存

構造主義

・**ラカン**（1901～1981）

フロイトの精神分析に着想し、人間は他者を鏡として自己を形成していくとした

→「人間の欲望は、他者の欲望である」

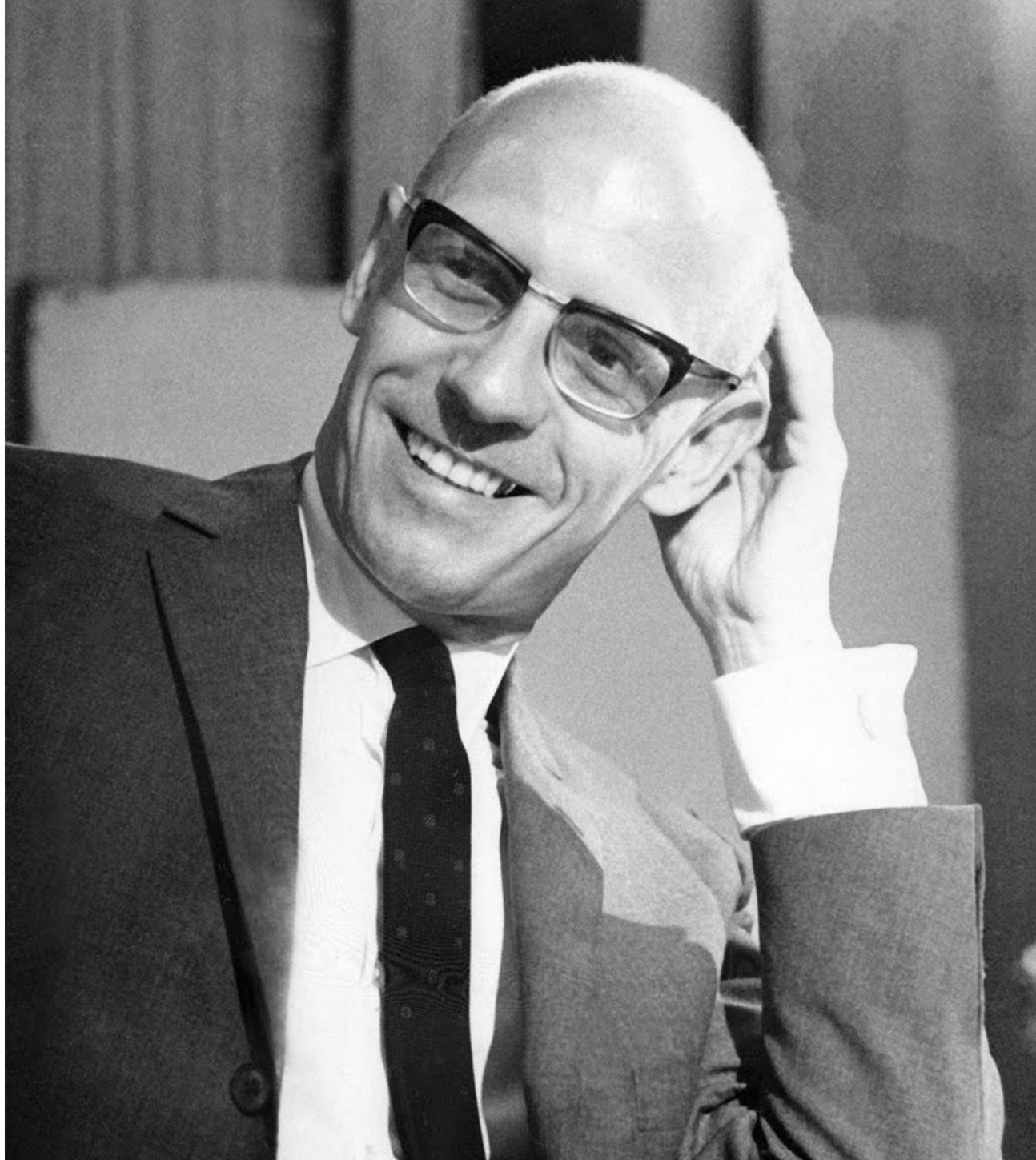
・**フーコー**（1926～1984）

知・権力・自我がどのように影響しあうかを考察

→「死の権力」から「生の権力」へ

〈生の権力〉

義務教育などによって自己は画一化され、相互監視（パノプティコン）のもとに置かれる



リベラリズム

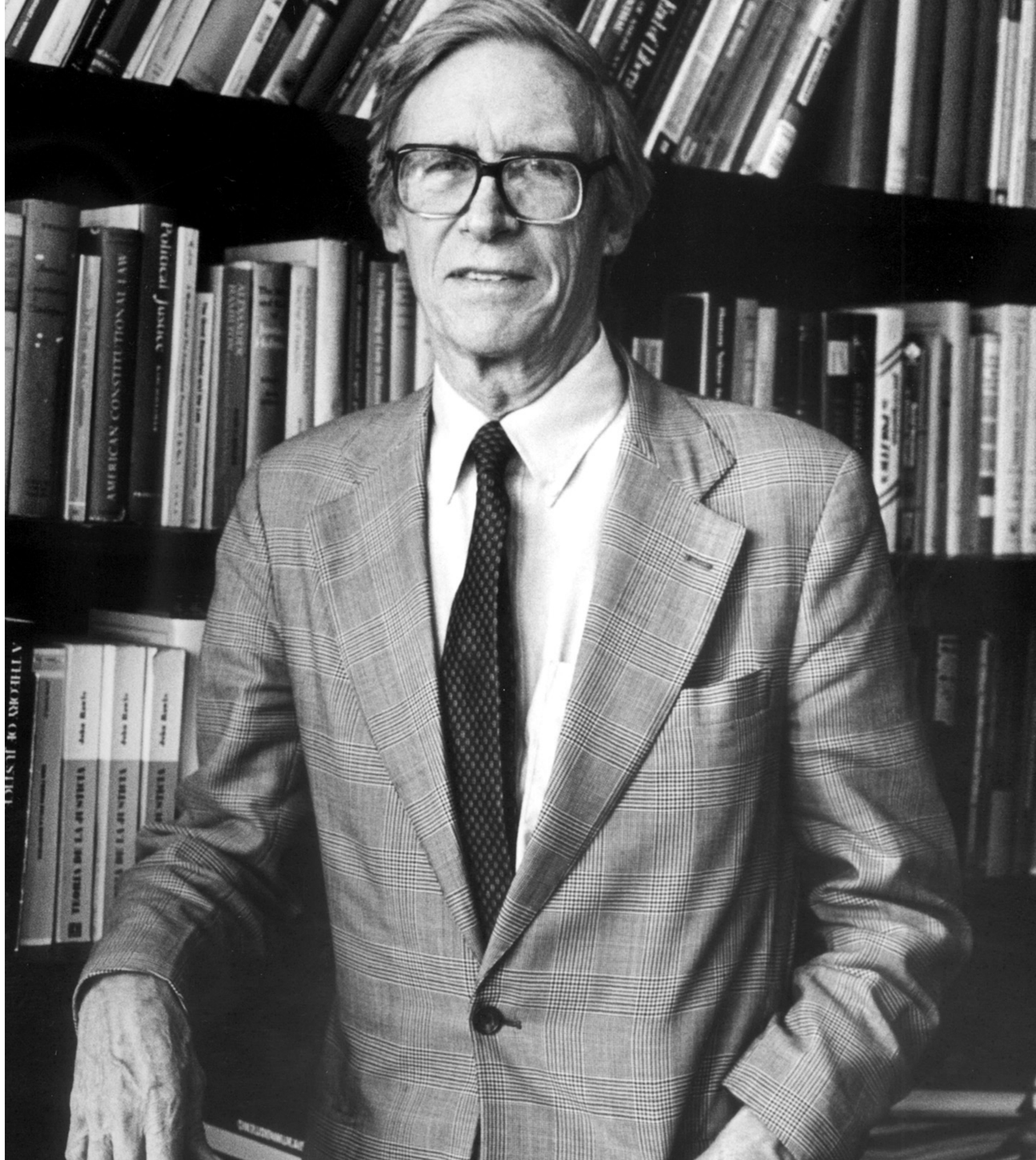
・ロールズ（1921～2002）

ロックらが行ったように「自然状態」を再設定し、社会構造を再構築した

「無知のヴェール」

1 自身の社会的な地位・階級・身分
2 自身の才能・能力・容姿・体型
3 自身の考え方
4 社会の文化状況・経済状況

のいかなるものも知らないことを原初状態とし、この原初状態において選択される社会制度こそが公正であり、正義にかなったものであるとした。



哲学するとはどういうことか

終